

歴史学から見た京都学派

－西田幾多郎と哲学の道－

2019.11.30 第92回 名誉教授懇談会 講話(文系)

林晋(本名:八杉晋)
元 文学研究科 現代文化学系

hayashi.susumu.2m@kyoto-u.jp
susumu.yasugi@gmail.com

shayashiyasugi.com shayashi.jp

このスライドは shayashiyasugi.com と shayashi.jp に掲載します。

この講話で言う京都学派とは？

- 大正の初めから昭和20年代にかけて、西田幾多郎(にしだきたろう)、田辺元(たなべはじめ)という京都帝国大学文学部哲学科の二代の教授を中心に形成された哲学者・思想家たちの集団。
 - 「京都学派」という名称は、この学派の一員ともみなされる京大哲学出身の唯物論思想家戸坂潤が、西田・田辺の思想「無の論理」を批判する際に使い始めたもの。
 - 「京都学派」には、この「哲学の京都学派」の他に、桑原武夫や今西錦司といった人文研の京都学派や、内藤湖南などを中心とする文学部東洋史の京都学派などがあるが、この講話の「京都学派」は、元祖ともいえる「哲学の京都学派」に限って使っている。
 - 他分野の京都学派の末裔の皆さまへ:どうかご容赦を m(__)m

歴史学の立場から京都学派を見直す 1/4

- 数学史や情報技術史、情報社会学をやっていた林が、京都学派研究に手を染めたのは、ドイツの数学者D.Hilbert が遺した19世紀の日記を分析するために作った[ITツールSMART-GS](#)のサンプルを、田辺元の日記を使って作るためだった。
- 正直の所、哲学への興味は、ほぼ無かった、というより、哲学を知らなかった。ところが、始めてみると、知りたかったが手がかりが無かった、Hilbert の数学思想の背景が、田辺元を通して見えることが分かり、面白くなって10年ほど研究を続けている。
- 退職後の今も、[石川県西田幾多郎記念哲学館](#)の[西田新資料](#)翻刻プロジェクトのお手伝いなどを続けている。

ちなみに、このプロジェクトもSMART-GS利用

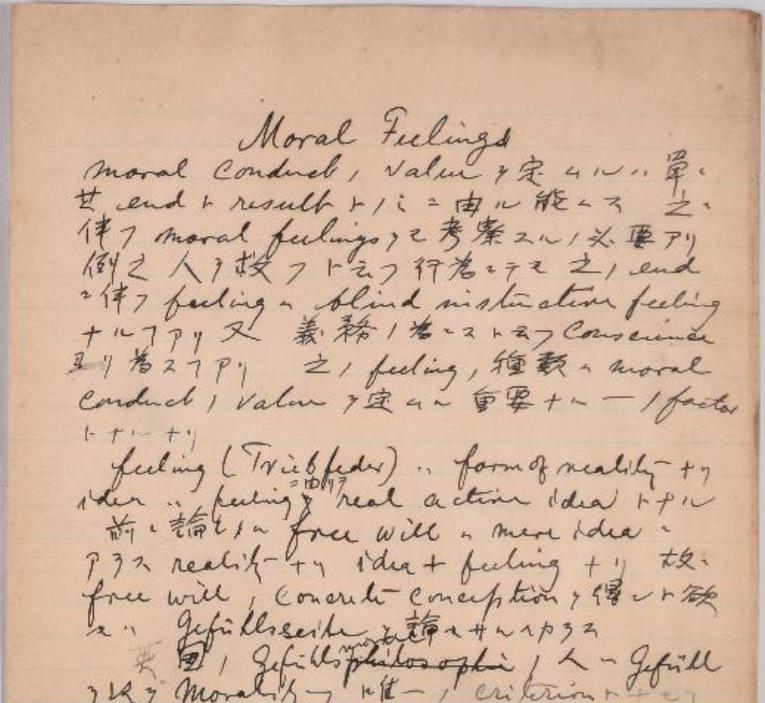
nishida2019-L-02-01-13.gsx - SMART-GS L-02-01-13--0001

ファイル マークアップ ツール 検索 RW レボジトリ 設定

Images Notes

root
L-02-01-13
0: L-02-01-13-0001
1: L-02-01-13-0002
2: L-02-01-13-0003
3: L-02-01-13-0004

L-02-01-13



Moral Feelings
Moral Conduct, Value 定ムルハ單ニ
其 end ト result トノミニ由ル能ハス 之ニ
伴フ moral feelings ヲモ考察スルノ必要アリ
倒之人ヲ救フト云フ行為ニテモ之ノ end
ニ伴フ feeling ハ blind instruction feeling
ナルアリ又 義務ノ為ニスト云フ Conscience
ヨリ為スアリ 之ノ feeling ノ種類ハ moral
conductノ valueヲ定ムル重要ナル一ノ factor
トナルナリ
feeling (Triebfeder) ハ form of reality ナリ
idea ハ feeling 實 active idea トナル
前ニ論シタル free will ハ mere idea ニ
アラス reality ナリ idea + feeling ナリ 故ニ
free will, Concrete conception ヲ得シト欲
スニ Gefühlseite ヲ論セサルヘカラス
英國ノ Gefühlphilosophie ノ人ハ Gefühl
ヲ以テ Morality 唯一ノ criterium トナセリ

Compact Editor Editor

Note1 Note2 Note3 OCR

Browse Edit Source Paste Mark up Text Search Highlight

B I U (default)* 18

\$0\$Moral Feelings
\$1\$moral conductノ valueヲ定ムルハ單ニ
\$2\$其endト resultトノミニ由ル能ハス 之ニ
\$3\$伴フ moral feelingsヲモ考察スルノ必要アリ
\$4\$例之人w救フト云フ行為ニテモ之ノ end
\$5\$ニ伴フ feelingハ blind instruction feeling
\$6\$ナルトアリ又義務ノ為ニスト云フ Conscience
\$7\$ヨリ為スアリ 之ノ feelingノ種類ハ moral
\$8\$conductノ valueヲ定ムル重要ナル一ノ factor
\$9\$トナルナリ
\$10\$ feeling(Triebfeder)ハ form of realityナリ
\$11\$ideaハ feeling real active ideaトナル
\$12\$ 前ニ論シタル free willハ mere ideaニ
\$13\$アラス realityナリ idea+feelingナリ 故ニ
\$14\$free willノ Concrete conceptionヲ得シト欲
\$15\$セリ Gefühlseiteヲ論セサルヘカラス
\$16\$moral[小サク間ニ挿入サレテイル]
\$17\$ 英国ノ Gefühlphilosophieノ人ハ Gefühl
\$18\$ヲ以テ Morality 唯一ノ criteriumトナセリ
\$19\$ instruction feeling
\$20\$ feeling of duty (conscience)
\$21\$ religious feeling
\$22\$Gefühlノ發達ハ intensification of feeling ナリ

歴史学の立場から京都学派を見直す 2/4

- この研究のために慣れない哲学を勉強し、田辺元の「種の論理」などについて論文をいくつか書き、西田・田辺記念講演などもさせてもらったのだが、同じ京都学派を対象としながら、どうも、哲学者が行う研究と自分が行う研究がかなり違うらしいことに気付いた。
- 例えば、一番最初に書いた論文『[「数理哲学」としての種の論理](#)』（日本哲学史研究、第7号、2010年9月）で、一か所だけ、どの様に頑張っても史料による裏付けができなかった所があり、涙を呑み想像をたくましくして書いたところ、哲学者たちは、そこ**だけ**を褒めてくれた。
- 林の様なスタイルの京都学派研究は、ほとんどなく、類似したものは、林の知る限りでは、[教科書裁判で有名だった家永三郎の「田辺元の思想史的研究 戦争と哲学者」](#)のみ。

歴史学の立場から京都学派を見直す 3/4

- 哲学者の京都学派研究は、京都学派の哲学者の哲学的言説を対象にして、そののみを利用して自身で哲学する。
- 家永や林の京都学派の思想史は、歴史研究なので、歴史資料に重点を置き、また、時にはインタビューなども交えて「京都学派、京都学派の哲学とは何であったのか」を分析していく。
- 歴史資料、特に一次史料をもとに研究を進めると、意外なものが見えてくるのが良くある。史料調査・分析は理系の学問での観測、観察、実験の様なものなので、研究者や人々の、通説・先入観・思い・願望・思想など、を簡単に吹き飛ばす。

歴史学の立場から京都学派を見直す 4/4

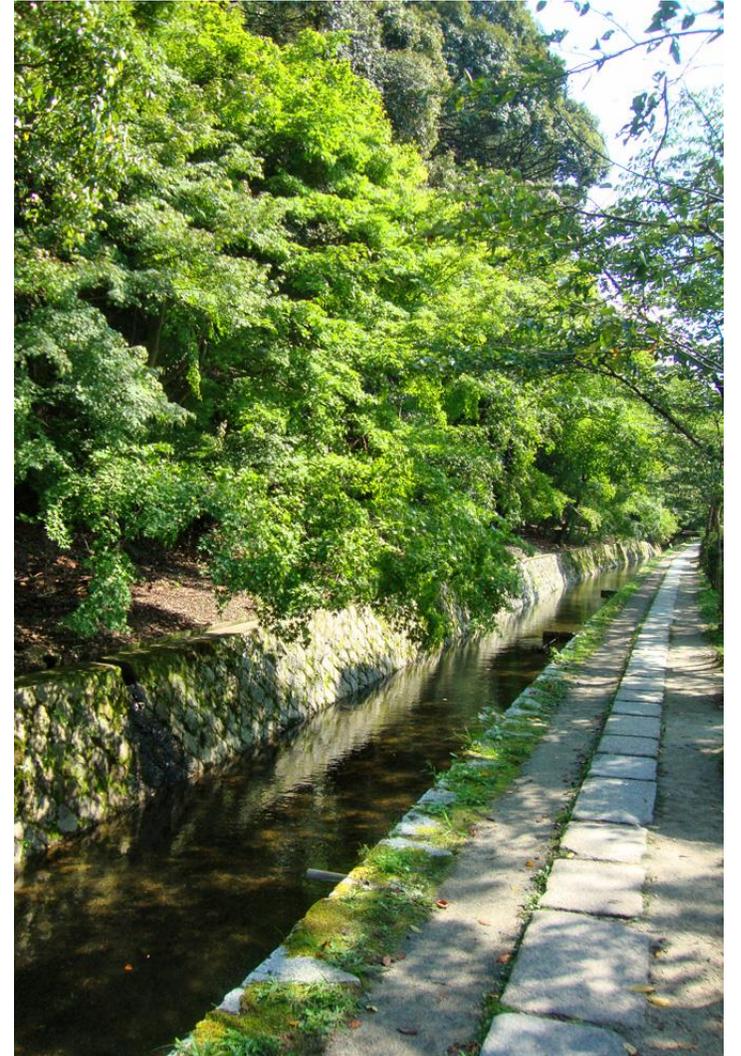
- 歴史研究者の林の目からすると、従来の京都学派研究は、このような一次史料ベースの研究があまりに少なかった。
- 京都学派関係の史料は、実は大量に残されている。これを分析していくと、新しい観点が開けてくる。
- それにも関わらず、従来の京都学派研究では、そういう一次史料研究があまりに少なかった。
- だから、何かを少し調べると、従来の常識に反するものがドンドン見えてくる。
- その様な実例を二つ、林の研究から。

西田幾多郎と哲学の道

- おそらく、西田幾多郎と聞いて、多くの人が一番に連想するのは、**哲学の道**。最近のインバウンドの拡大もあって、哲学の道の情報は海外の京都観光のウェブサイトなどに沢山みられるようになってきている。
- Japan-guide.com は、その様なものの代表だが、このサイトの**哲学の道の記事**には、西田が京大への通勤途中、哲学の道を歩きながら思索をしたと書かれている。しかし、京大時代の西田が長く住んだ二つの家は、いずれも百万遍の北西に位置したのでこれはあり得ない。
- ここまでではないものの、西田幾多郎と哲学の道の関係は大きく誤解されている。それで、色々調べてみた。その結果...
- ちなみに、この「西田と哲学の道」の調査には**学術的意味はありません**。楽しいのでやっただけです。

哲学の道

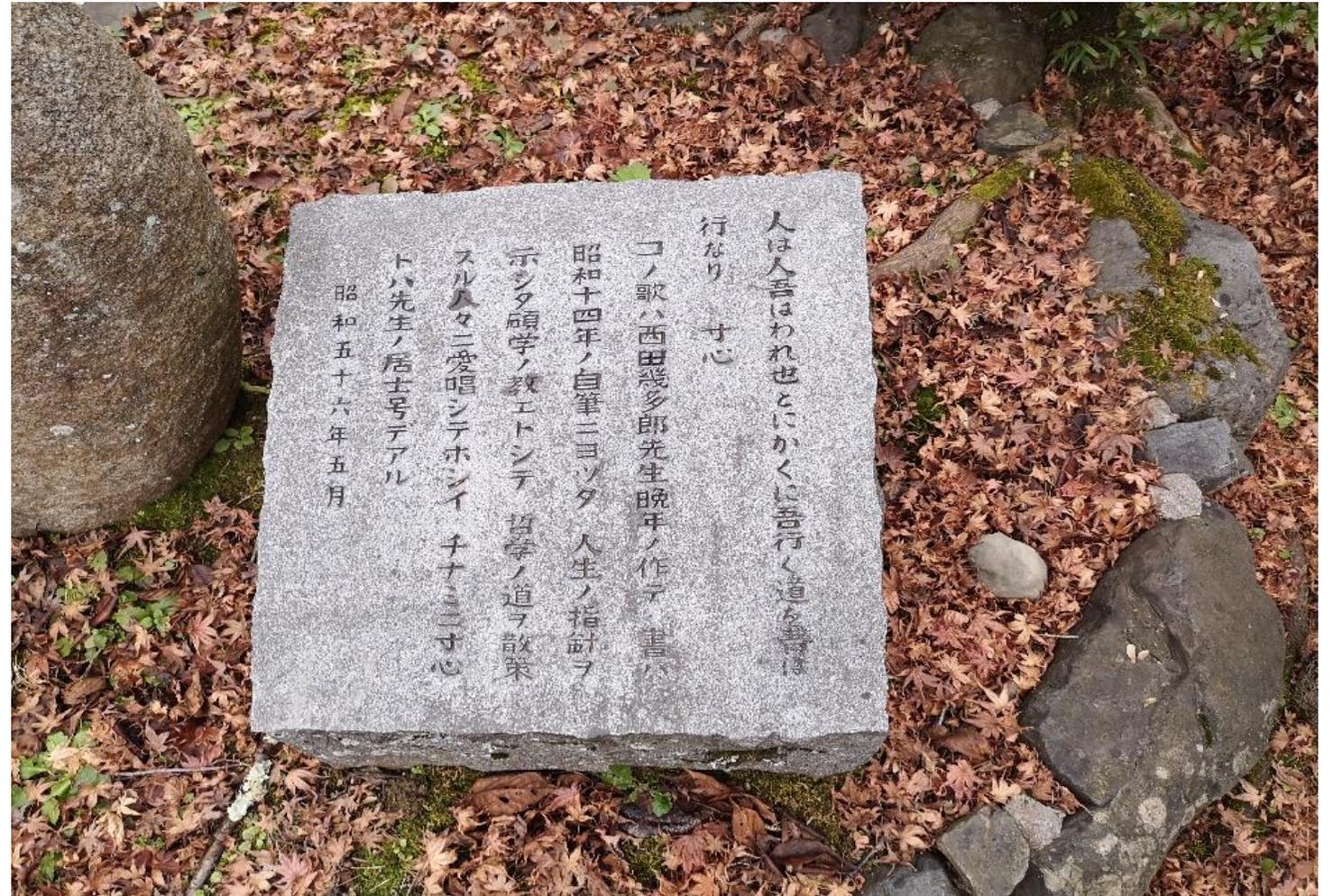
- 滋賀県大津を起点とする琵琶湖疏水は、山科盆地を経て、東山を貫く第三トンネルを通過して京都蹴上に至る。主線は白川と合流して京都の街を潤すが、蹴上で別れ北上する疏水分線と呼ばれる支線がある。
- その疏水分線に沿う道の、若王子神社から銀閣寺までの部分を哲学の道という。
- 地元の哲学の道保勝会が自発的に整備を始めた、この地は、今や世界的に知られる観光地である。



西田幾多郎と哲学の道

- その哲学の道には、西田幾多郎の歌碑があり、そのためもあってか、西田が良く散策しながら哲学したので、哲学の道と呼ばれる、と説明されることが多い。しかし、歌碑の説明文や、保勝会のWEBページを見ても、西田が歩いたから哲学の道だとは書いてない。
- 実は、林は、以前、保勝会の幹部の方から、西田先生が歩いたのは別の場所だったらしいと聞いたことがあった。
- これを話すと多くの人が大変驚くので、面白いと思って、ある時、弟子の証言を調べて、[どうも違うらしいとブログに書いた](#)。

哲学の道の歌碑



読売新聞「名言巡礼」と西田幾久彦さん

- 読売新聞日曜版に「名言巡礼」という連載があるが、その担当者が、このブログ記事に興味を持ち、取材してくれて、西田幾多郎と哲学の道にちなむ名言巡礼の記事が掲載された。
- この記事を知った西田幾多郎のお孫さんの西田幾久彦さんから連絡があり、電話でお話した所、祖父に手を引かれて哲学の道を歩きました、とのことだった。
- ただ、それは寺院を訪問したり、ピクニックにでかけるときなどの話で、「哲学の道を歩きながら、祖父が思索をしたかどうかはわからない」とのことだった。(林晋ブログ:[哲学の道と西田幾久彦さん](#))

疏水が山から下りてくる所

- 西田が哲学しながら歩く時の、前のめりの激しい様子は、お弟子さんや息子さんの証言が残っており、子供や孫のことを常に気にかけていた西田が、殊の外可愛がっていた幾久彦さんの手を引きながら思索にふけるとは思えない。
- しかし、ここで林の歴史家としての研究意欲がむらむらと湧いた。西田と幾久彦さんがゆったりと歩く姿を、映画の一シーンの様に思い浮かべたい！哲学の道と仰るが、実は、疏水分線の道のすべてが哲学の道ではない、お二人はどの辺りを歩いたのだろうか？
- それで、具体的にどのあたりまで歩かれましたかと問うと、「疏水が山から下りてくるところまで」という答えだった。
- それはどこなのか？林は興味津々となった。

インクラインか？ 扇ダム放水路か？

- 京都市水道局の琵琶湖疏水記念館学芸員白川さんの協力も得て、「疏水が山から下りてくるところ」の候補を検討したところ、蹴上のインクラインか、東山中高等学校の敷地を貫く扇ダム放水路(次ページ図)だろうということになった。
 - 隠れた名所、扇ダム放水路については、ダム愛好家夜雀さんのサイトに詳しい(1, 2)。また、林の[ブログ記事](#)も。
- 写真では、分かりにくいですが、扇ダム放水路の背景の山は大きく、いかにも疏水が山から下りてくるように見える。一方、インクラインの背景は丘程度で山感が少ない。おそらくは、扇ダム放水路が、その場所で、そして、当時小学生だった幾久彦さんには、それは次ページの図のように見えていたはずである。

扇ダム放水路



西田が愛した京都市動物園

- 西田幾多郎は動物好きで、常に猫を飼っていたことが知られているが、京都市動物園を好み、お子さんやお孫さんを連れて行くだけでなく、一人で訪れていたことが知られている。
- 哲学の道に沿う疏水分線は、それを南に辿ると、若王子神社前でトンネルに入る。哲学の道もそこで終わるが、若王子前の道を西に辿り、鹿ヶ谷通に入り、それを南下すると扇ダム放水路にいたる。
- この放水路の横には、野村美術館や野村別邸碧雲荘などの豪邸が並ぶが、放水路横には小道があり、前ページの図は、その小道から撮影したものである。そして、この道をさらに西に辿ると白川通にでるが、そこにあるのが京都市動物園。おそらく、西田は幾久彦さんの手を引いて、このコースを辿ったのだろう。
- 現在、扇ダム放水路の古い写真を探している所。

西谷啓治と田辺元 1/2

- 「西田幾多郎と哲学の道」の調査は思想史には関係しない。林の趣味のようなもの。林は過去の印象深い出来事を知ると、その時の情景を無性に見たくなる。
- もう一つの話は、その様な林の願望が京都学派の歴史研究だけでなく、哲学者が行うような京都学派研究にも影響を与えるかもしれない知見を導いた例。
- 現在、京都学派は、西田、田辺、そして、西谷啓治(にしたにけいじ)という三代の哲学者で理解されるようになってきている。西谷啓治という哲学者は、西田に比べれば無名だが、最近、特に海外での評価が高まっていて、ハイデガーより西谷の方が重要だという様な意見がドイツの若い哲学者からでたりする状況になっている。

西谷啓治と田辺元 2/2

- 西田の定年退官の後、その後を継いだ田辺元は西田に論戦を挑むようになり、この二人の関係は陰悪なものになっていった。そして、彼らの弟子の多くは、西田の側についた。
- その中で、特に西田哲学に傾倒したのが西谷であった。西谷が西田について語り始めると、ファンがアイドルについて語るかの様である。
- 西田哲学と田辺哲学の対立、西田哲学と西谷哲学との関係について論じる哲学論文は数多い。しかし、田辺哲学と西谷哲学との関係について論じられることは、ほとんどなかった。
- ところが一旦哲学論文を離れて、この三人の人間関係を調べると、全く違った情景が見えるのである。

西田幾多郎旧宅の保存運動を通して 1/4

- 林は、雑誌「哲学研究」603号に「西谷啓治と田辺元」という論文を発表したが、これは一切の対立を超えた仏教的な西谷の「空の思想」が、実は、対立こそが世界の本質とする田辺の「種の論理」と表裏一体の構造をもつことを指摘したものの。
- 林の研究の中では、「哲学者による哲学史」的な要素が大きい。しかし、その着想は、清風荘の近くにあった田中上柳町の西田旧宅（借家）の保存運動を通して得られたものだった。（次ページ図参照）
- この家は、多くの西田研究者が、西田哲学の中心概念「場所の論理」が育まれた舞台とみなしている家だが、マンション建設のため解体が決まるまで人が住んでいたため、調査がされてなかった。

西田幾多郎 田中上柳町旧宅

[詳細はこちら](#)



西田幾多郎旧宅の保存運動を通して 2/4

- 林は史料の保全には何度も関わっているが、建物の保全は初めてだったが、建物の所有者のご子息からの依頼で保存の活動を始めた。
- 「過去の印象深い出来事を知ると、その時の情景を無性に見たくなる」と書いたが、この古い家の内部最初に見た時、文章だけで知っていた出来事が目の前で再現されるかのようなようだった。
- その事に感動して保全運動に熱中した。その経緯の詳しいところは、[こちらの論説](#)をご覧ください。
- その論説にも書いたように、この家に西田が住んだ頃の情景を求めて、林は西田の縁者や弟子たちが遺したエッセイなどを読み漁った。
- その結果、不思議なことに気が付いた。

西田幾多郎旧宅の保存運動を通して 3/4

- 京都学派の西田哲学の継承者としては、西谷の世代の高坂正顕、高山岩男、鈴木成高、そして西谷が、京都学派四天王と呼ばれて有名なのだが、この人たちと西田の人的距離が、それより少し上の三木清と、さらにその上の世代の「弟子」たちに比べて、希薄なのである。
- それに比べると、西谷と田辺の人的関係は、非常に濃密であった。しかも、その一方で、この二人は常に熾烈な哲学的論争を繰り広げていたのである。
- この事実を知れば、西谷が西田、ハイデガーと共に、「もう一人の師」として仰いだ田辺の影響が西谷哲学に全く現れていないとしたら不自然でさえあることが見えてくる。

西田幾多郎旧宅の保存運動を通して 4/4

- そこまで気付けば、田辺と西谷の哲学の裏表関係に気付くのは簡単なことであった。
- つまり、林は哲学者の人間関係についての史料から、その哲学者たちの哲学の関係の見落とされていた部分に気が付くことができたのである。
- そして、その人間関係についての知見は京都学派の哲学者たちの哲学理論の関係性研究を通してでなく、それとは全く関係がないはずの古いボロボロの家の保全活動を通して得られたのである。

結論：歴史学的観点からの京都学派研究

- 駆け足で紹介した、林が経験した二件の事例、特に後者の事例から、分かることは、近現代史の時代の現象である哲学の京都学派の場合、哲学とは直接関係がない歴史資料の解明により、哲学的にも意味がある知見が得られることがあるということ。
- そういう研究が、未だほとんどなされていない一方で、京都学派の哲学者たちや、その関係者が遺した手つかずの史料は大量に残っている。これは近現代史の特徴そのもの。
- その故に、歴史学的手法を京都学派研究に応用すれば、京都学派研究に大きな進歩を期待できる。
- その事を指摘して、この講話を終わりたい。